

記憶の品

をたどって

6

tadotte@asahi.com

砂まみれのケースに入った名札。「田老一小」とあり、校章があしらわれている。にじんだ手書きの文字は「四年一組 佐々木葵」と読める。

震災から1年半たっても、被災した岩手県宮古市田老地区の住宅跡に残されていた。持ち主を捜して昨秋、学校や周辺の住宅、店舗を回った。行き着いた先は、漁港横の山を削って造成した高台の集団移転地だった。

仮設住宅から移ったばかりの佐々木せつ子さん(58)は、名札を見て驚いた。



「うちの次男のものです」
27歳の次男は、震災前から関東で働いている。「大切なものは、よく机の引き出しに入れていました」
せつ子さんによると、もともとケースは青だった。いまは完全に色落ちしている。

机に入れた？ 四年一組の名札



見つかった名札。もともとケースは青だったという

田老地区は、「万里の長城」と呼ばれた二重の巨大防潮堤で守られていたが、津波はそれをやすやすと越えた。181人が犠牲になった。佐々木さん一家は防潮堤のすぐ前に住んでいた。次男が小学2年の時、防潮堤からジャンプして足の骨を折った。名札はその近くにあった。

せつさんはあの日、地震の直後に、港の作業場から自宅に戻った。さらに車で内陸の親族宅を目指したが、津波が防潮堤を越えることはないだろうと思っていた。坂の上で振り返って、腰を抜かした。街が海水に沈んでいた。次男から携帯電話に連絡があった。「大丈夫、大丈夫」



震災遺構の「たろう観光ホテル」=いづれも岩手県宮古市

と強がった。でも、自宅は土台だけになった。後日、見つけたのは、せつ子さんの長靴の片方だけ。名札は数少ない「記憶の品」になった。一帯は災害危険区域で、家は建てられない。もう海の近くでは暮らしたくない。仕事場も内陸に変えた。遠洋漁業を続けてきた夫の常夫さん

(64)も昨秋、船を下りた。移転先の高台には、161の宅地がある。新しい家が並び、住宅展示場かともみまがう。見下ろす港のそばに、「たろう観光ホテル」が残る。震災遺構の第1号だ。6階建てのホテルは3階まで津波の直撃を受けて、壁がぶち抜かれて鉄骨がむきだしになった。その6階で、ホテルの社長が撮影した津波の映像を見せてもらった。

津波はよく「海が盛り上がる」と表現される。映像は違った。サーフィンで乗るような波が巨大になって押し寄せ、てっぺんが巻くように崩れながら、田老の街を襲う。ホテル近くに住んでいたせつ子さんの兄は今も行方不明。兄の妻は遺体で見つかった。その海岸に、以前より高い防潮堤が再来年度に完成する予定だ。

せつ子さんの次男も通った田老一中は、2013年秋の文化祭から、津波をテーマにした創作劇に取り組む。脚本・演出は生徒が担当し、3年間で3部作を演じた。昨秋は、昭和三陸津波(1933年)を受けた住民が、巨大防潮堤を造るか高台に移転するかで悩む第1部を再演した。監督を務めた山下晟慎さん(15)たちが付け加えたせりふがある。

「(防潮堤は)津波から逃げる時間ば、かせぐもの」
過信してはいけない。街の叫びに聞こえた。(山浦正敏)